

服装にみられる気楽さ

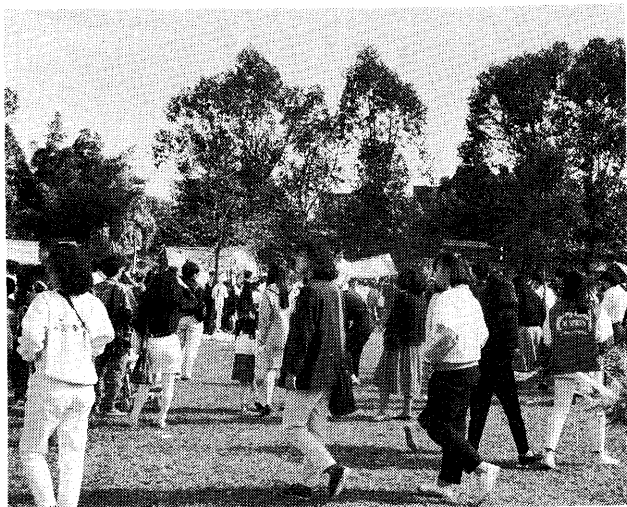
佐藤 幸人

めいめい  
勝手気ままに

東アジアでは衣食を比べると、食は洋風化の波をかぶりながら、伝統的な食べ物が根強く嗜好されるのに対し、衣はあっさり洋風に染まってしまう。台湾の街角でも見かけるのは九分九厘、洋装だ。

洋風化の流れは日本の植民地時代にすでに始まっていた<sup>(1)</sup>。戦後は一九六〇年にチャイナ・ドレスが流行ったことはあったが、その後はミニスカート、ベルボトム、ジーンズ等々、ほとんどの場合、日本と同様、欧米の流行に追随した<sup>(2)</sup>。

それゆえ今日の台北の街角を歩いて、日本との大きな違いを感じることはない。しかし、微妙な違いがないわけではない。日本人の女性にきくと、色彩が派手とか縫い目が粗いとか指摘する。そうそう、ヒラヒラのフリルがたくさんついたお姫様のような服を台北ではよく見かけたが、確かに日本ではあまりお目にかかれなような気がする。



日本の大学？ いいえ台湾・輔仁大学の学園祭

けれども、最も強く感じる違いは服装に対する姿勢である。日本ではどのような場でもどのような服装を着るべきかというTPOが、かなり厳格に決められているように思える。しかし、台湾はこの種の規範が非常に希薄にみえる。台湾では結婚披露宴でも来客は普段着のまま構わない。

日常の中で規範の希薄さが最も顕著なのはオフィス街の女性たちであろう。日本に帰国して驚いたのは、東京のオフィス街の女性が、どの顔どの顔白く、口が赤いということだった。後章で述べられるように、香港でもオフィス街の女性は入念に化粧をほどこし、相應の服装をしなければならぬ。しかし、台湾のOLたちはオフィスでも素颜、あるいはごく薄い化粧でいることが多い。日本の女性に負けず劣らずの化粧をしている人もいるが、

少数派である。

オフィスの男性も必ずしも背広を着ていない。オートバイ通勤が多いせいか、ノーネクタイにジャンパーでいる人も少なくない。

日本では流行が人を脅迫し、筆者のように適応できない者を劣等感で苛むが、そのようなこともないようである。各人が着たい服を着ればいい。台湾は服装に関して気楽な社会である。

### 即物的な

台湾の気楽さ、いいかえると規範の弱さは、服装に限られない。程度の問題といってしまうえばそれまでだが、日本との格差はかなり著しい。

### ブランド志向

例えば交通規則。日本では夜、いかに人気がなくても、車が信号を無視することはないだろう。あるいは職業倫理。台湾でも一九九〇年初めまで株価高騰に沸いたが、職場で株価市況のラジオ放送を聴き耽る姿は、日本人には受け入れがたいにちがいない。

規範が弱い社会ではいきおい、金銭が唯一とは言えないまでも有力な価値基準になってしまうかもしれない。そのことはブランド志向につながる。車ならばベンツ、酒はXO、時計はロレックス、ライターはデュポン等々。服装もしかり。

『謎の島・台湾』にある、株価高騰時にブランド品に身を固めた中年女性の漫画は、台湾人のブランド好きを的確に表している。彼女の身にまとうブランド品は、彼女が金持ちであること以外のなにも意味しない。

しかし、しよせんは金、人の価値そのものを表すわけではない。したがって、それが失われて

も、自らの価値が減じたという傷はない。右に紹介した漫画の次のコマでは、株価暴落後、彼女はトレーナー姿に戻るのだが、態度は何を着ているかにかかわらず毅然としているのである。

注(1) 片岡巖『臺灣風俗誌』、臺北、臺灣日日新報社、一九二〇年、九七〜九九ページによると、当

時は依然、漢族の伝統的な服装が主流だが、すでに日本から導入された洋装や洋装風に改造された伝統服が広まりつつあったという。

(2) 『中央月刊』編輯部「從麵粉袋到精緻品味——四十年来臺灣服装的演變」(『中央月刊』、一九八七年九月)、八九〜九四ページ。

(3) 『謎の島・台湾』東京、JICC出版局、一九九一年、六二ページ。

(さとう ゆきひと/アジア経済研究所調査企画室)